サラ・ロイ
Sara Roy

ホロコーストからガザへ

パレスチナの政治経済学

岡真理＋小田切拓＋早尾貴紀 編訳

青土社

302.245
14

007306969

ホロコーストから学べ

バレスチナ人の問題

サラ・ロイ
[illegible]

ホロコーストからガザへ　目次

序章　ガザ地区とパレスチナの概要およびサラ・ロイの仕事　11　早尾貴紀

PART 1 ……

第一章　もしガザが陥落すれば……　50　サラ・ロイ

第二章　ガザ以前、ガザ以後　イスラエル－パレスチナ問題の新たな現実を検証する　58　サラ・ロイ

第三章　「対テロ戦争」と二つの回廊　109　小田切拓

PART 2 ……

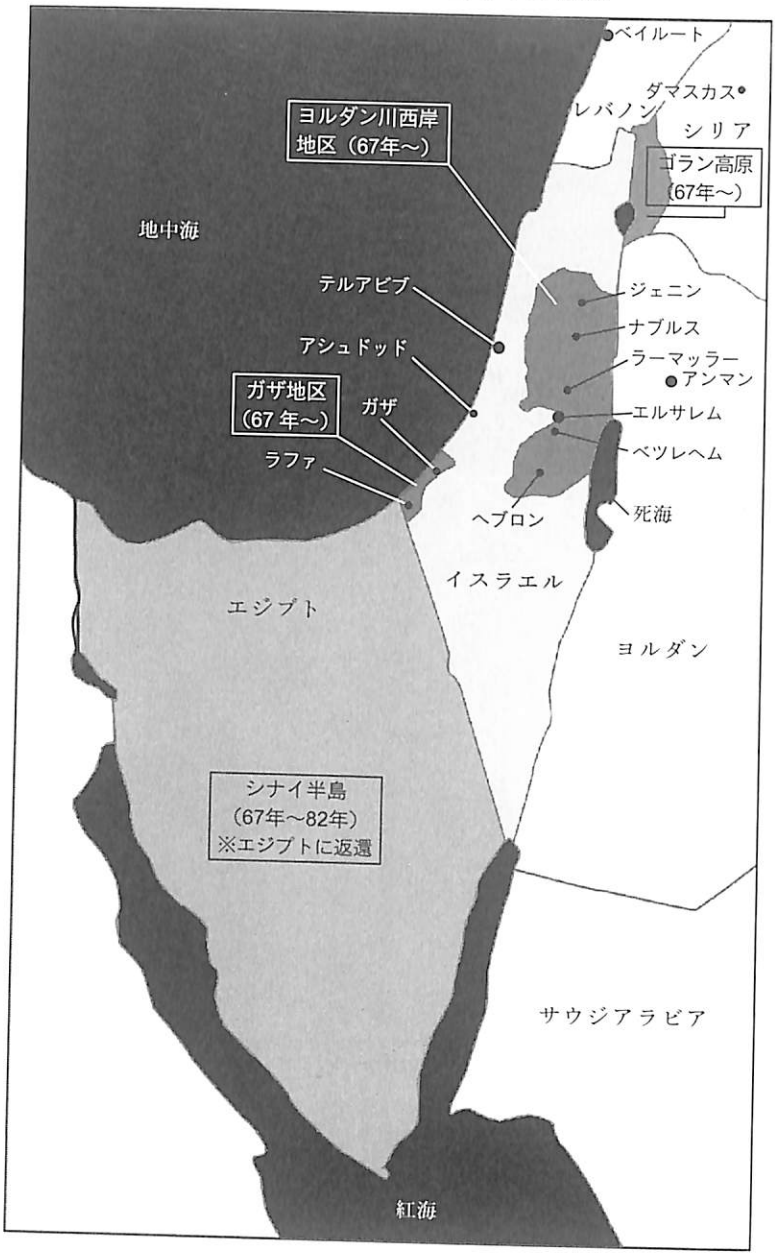
第一章　ホロコーストからパレスチナ－イスラエル問題へ　169　サラ・ロイ

第二章　〈新しい普遍性〉を求めて　ポスト・ホロコースト世代とポスト・コロニアル世代の対話　215　サラ・ロイ × 徐京植

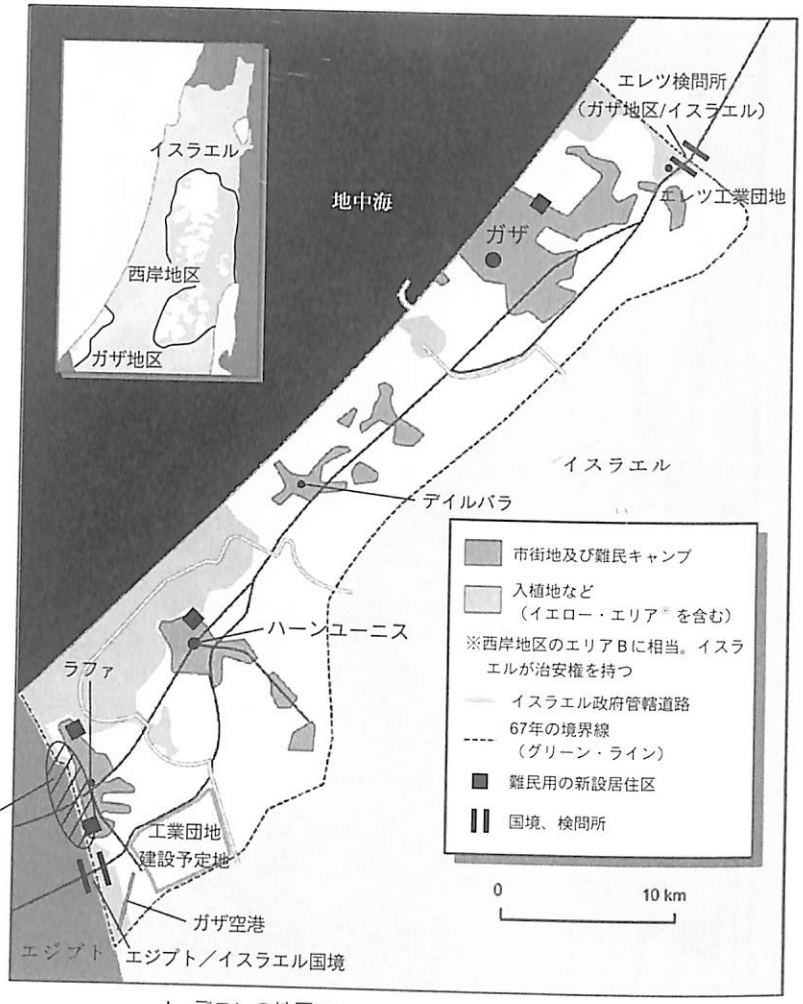
編訳者あとがき　274

新装版あとがき　281

【地図1】イスラエルとその占領地

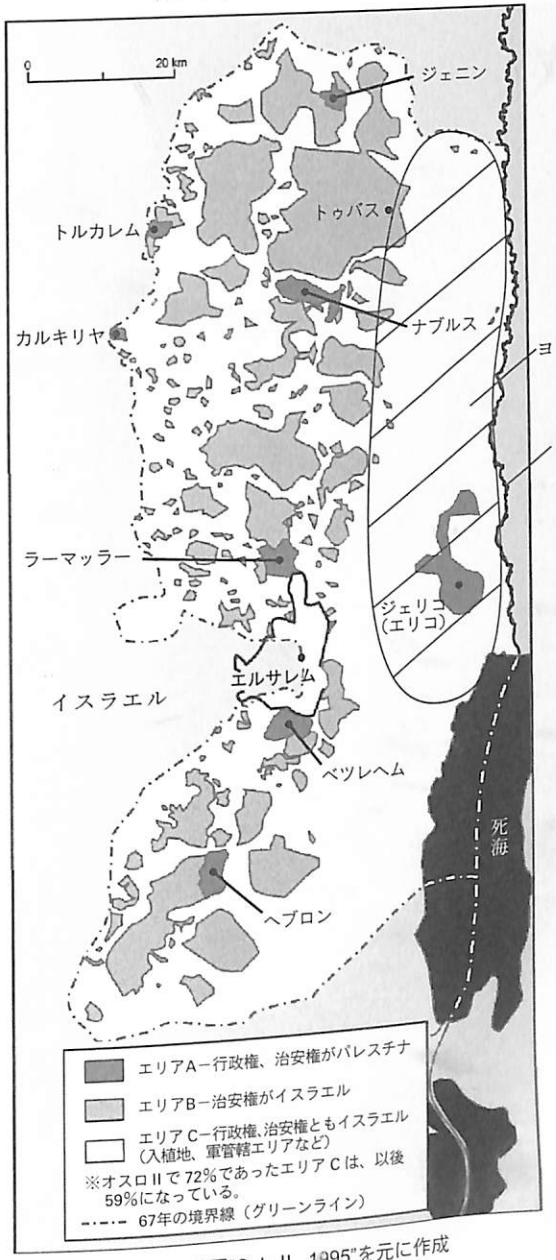


【地図3】ガザ地区（オスロ体制期）



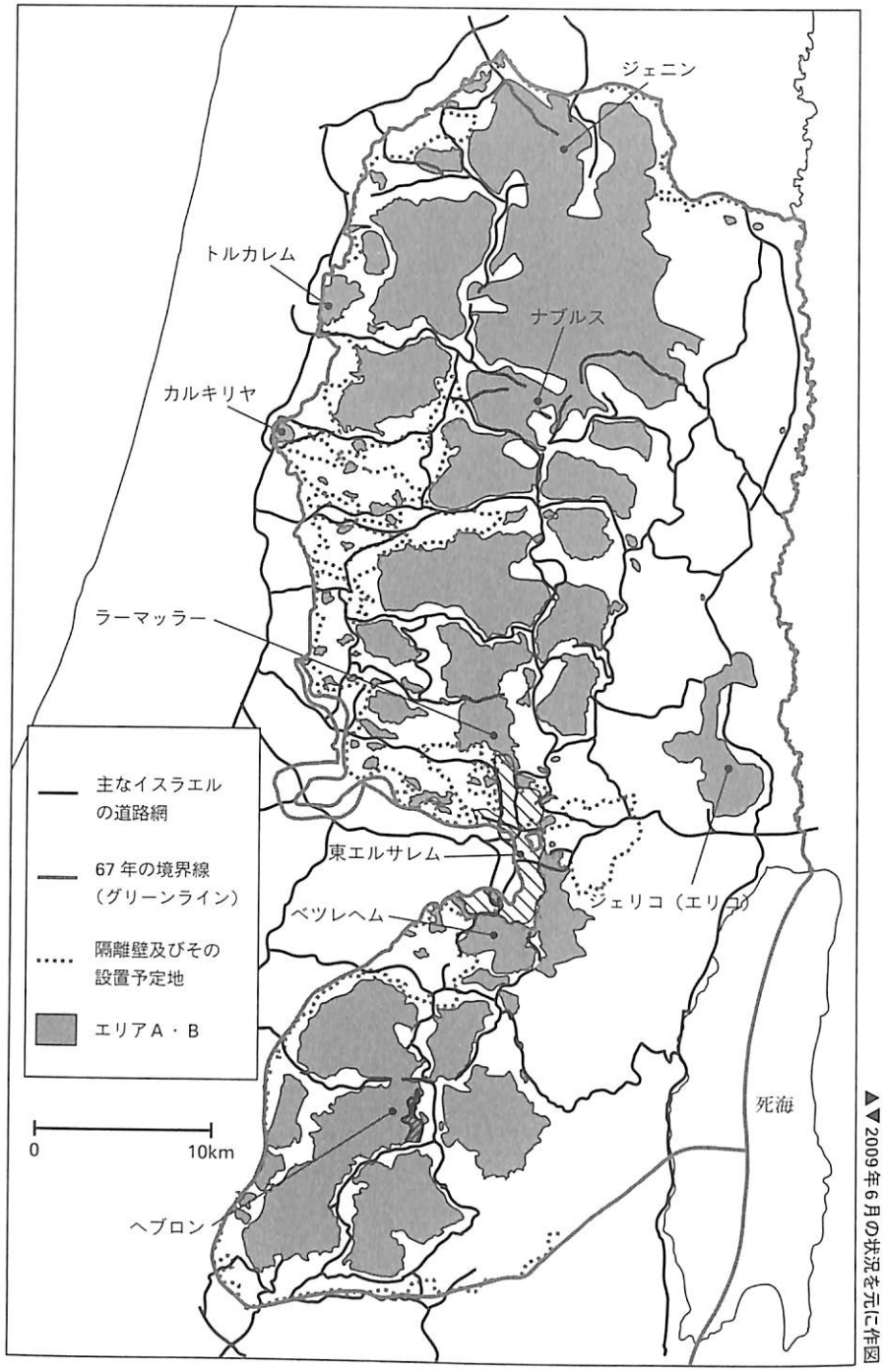
J・デヨンの地図"The Gaza Strip, 2000"を元に作成

【地図2】ヨルダン渓谷とエリアA, B, C
（95年のオスロII時）



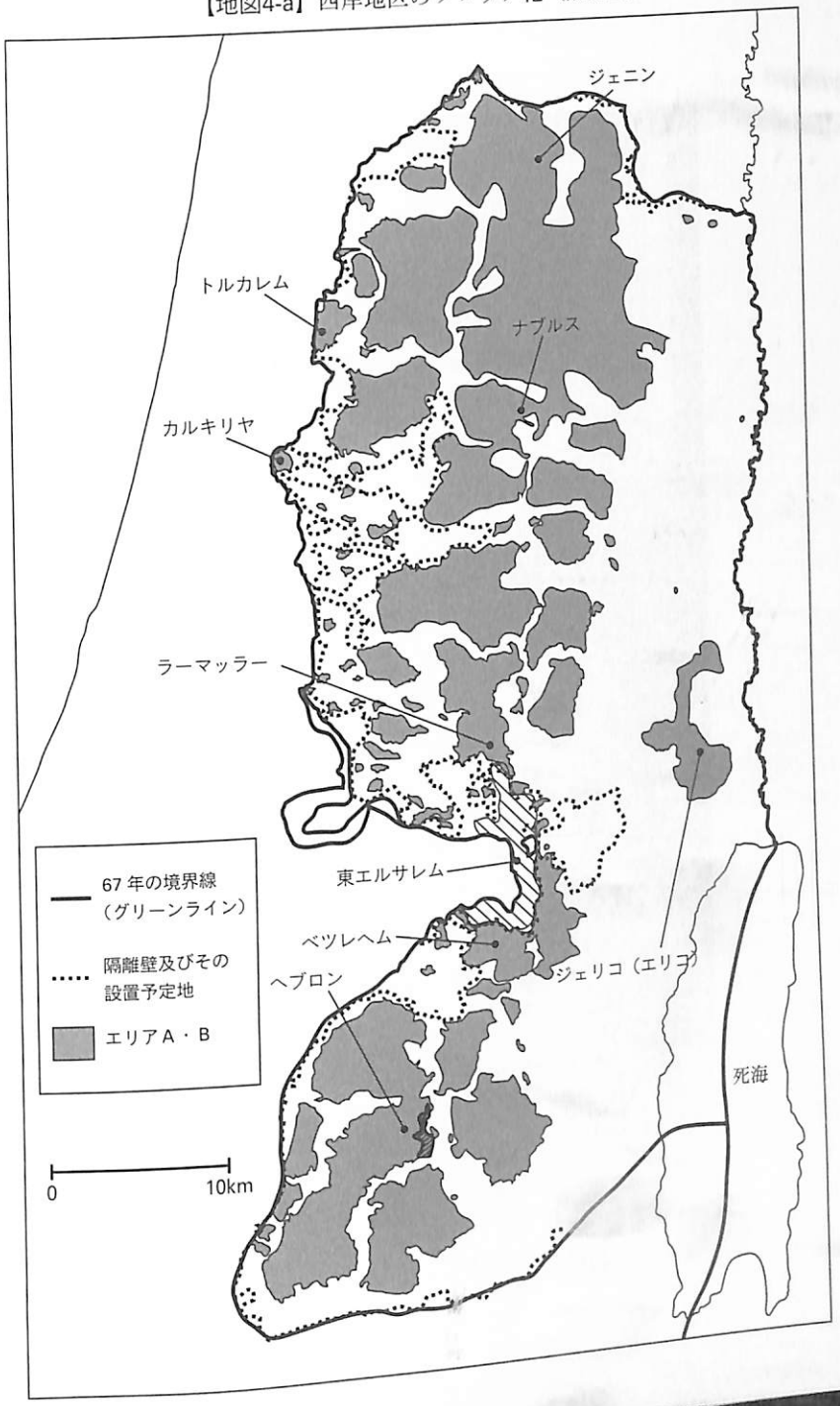
J・デヨンの地図"Oslo II, 1995"を元に作成

【地図4-b】西岸地区のブロック化（隔離壁＋道路網）



▲▼2009年6月の状況を元に作図

【地図4-a】西岸地区のブロック化（隔離壁）



さいました。本書を迅速に刊行できたのも完成度の高い原稿が存在したおかげです。また、講演に参加できなかった日本の未知なる読者のために本書を刊行する意義を認めてくださり、編集にも積極的な提案をくださいました。一人でも多くの人に本書を手にしてもらえることが、サラさんの労苦に報いることになると思っています。

招聘者・編訳者を代表して　早尾貴紀

新装版あとがき

本書『ホロコーストからガザへ』の元となったサラ・ロイさんの来日講演が二〇〇九年三月初めで、それは〇八年一二月末から〇九年一月半ばにかけてイスラエル軍が行なった大規模なガザ地区攻撃・侵攻の直後のことであった。そして本書はその年のうちに編訳と加筆がなされて刊行された。

それから一五年が過ぎるが、そのかんにガザ地区で起きた一連の出来事および、二〇二三年一〇月七日のガザ蜂起とそれを契機に激しくエスカレートしたイスラエル軍の猛烈なガザ地区攻撃・侵攻（この文章を執筆している二四年一月半ばもなお継続中）を振り返ると、この〇八-〇九年の攻撃がその後のイスラエルの対ガザ政策の土台となっていることがわかる。すなわち、ハマース政権とは（ファタハとの連立政権も含めて）一切の政治交渉を拒絶、ガザ地区を封鎖し兵糧攻めをしながら軍事的に挑発を加え、ガザ地区内の抵抗運動からのロケット弾の発射などを誘発し、「報復」「テロリスト掃討」と称して一気に大規模なガザ地区攻撃・侵攻を行

ない、ガザ地区のインフラ・住宅地・学校・国連機関・医療機関を組織的に破壊する、というパターンである。その後、一二年、一四年、二一年と作戦名の付いた多数の死傷者を伴う大規模攻撃が繰り返されたほか、それ以外の時期にもより小規模な軍事攻撃は断続的に重ねられてきたのであり、総じて〇八年以降ガザ地区は絶えずイスラエル軍による包囲攻撃に晒され続けてきたと言っていい。二三年一〇月に事態が急変したわけではなく、すでにガザ地区はイスラエルによって「生存不可能」な環境へと作り変えられていくプロセスにあり、〇八年の攻撃はそれが具体的行動に移った転機を、二三年の攻撃はそれが一気に加速していく転機をそれぞれ示すに過ぎない。そのことを本書の「ガザ以前、ガザ以後」はよく示しており、根本的な構図と分析はそこで過不足なく描き出されている。

とはいえ、今度のガザ攻撃が露呈させたのは、本書刊行から一五年間、日本のアカデミズムでもジャーナリズムでもガザ地区理解がまったくと言っていいほど進展していなかった、ということでもあった。イスラエルのガザ政策を理解するうえで本書を凌ぐものは日本語では今なお存在せず、大手メディアには的外れなコメントばかりが溢れた。そのような脆弱な事態については責任の一端を私自身も痛感するところである。

他方でサラさん自身は、二〇〇〇年に始まる第二次インティファーダつまりオスロ体制の破綻を告げる民衆蜂起までを分析した『ガザ回廊』第二版（本書序章でその要約を示した）以降の状況の展開を、『ガザ回廊』増補第三版で具体的詳細にわたって分析し、一六年に刊行した「ガザ以前、ガザ以後」で示した基本分析について、さらに一二年と一四年の大規模攻撃およびその前後での占領政策の変化を踏まえて厳密に論じて

いった。サラさんにしか書けない圧倒的な文章であり、本書新装版に続いて、第三版の増補部分の日本語訳を中心とした二冊目の論集を青土社より今春にも編訳刊行する予定である（本書と同じく岡真理さん、小田切拓さん、早尾の三名による）。少しでもガザ研究・ガザ認識の空白を埋める一助とされたい。

ところで、今度のガザ攻撃において、これも新しい事態ではなく使い古された手法ばかりなのだが、イスラエルの政治家や軍人や評論家などから、頻繁にガザ住民を差別的に貶める激しい言動が多く見られた。「人間の顔をした動物」「原爆を投下せよ」「全員テロリストで有罪」などなど。また無差別な虐殺・虐待、大学・文化施設・公文書館の爆破。政策的な集団飢餓の創出。そして、虐待や爆破の現場で笑顔で記念撮影をしSNSに投稿する兵士たちと、飢餓状態を嘲るSNS投稿を流行させる市民たち。問題を指摘されても理解することがないため、この種の言動は攻撃初期から現在にいたるまで絶えることがなく、倫理崩壊に歯止めがきかない状況である（われわれは戦時・植民地期の日本人の所業を想起せずにはいられない）。

今こそサラさんが本書収録の「ホロコーストからパレスチナ-イスラエル問題へ」で静かに深く探求された「ユダヤ人の倫理・精神的高潔さ」を、あらためて読み直すべきであろう。それは、この民族浄化的・ジェノサイド的な攻撃の凄まじさとともに、倫理崩壊とも言える言動の蔓延のために、イスラエルの外部世界で、シオニズム批判と反ユダヤ主義とが混同される危険が生じているからであり、また欧米世界ではイスラエル批判を封じるために意図的にシオニズム批判を反ユダヤ主義の一形態とみなし禁じる動きが進行しているか

らである。私たちは、自分自身がそうした反ユダヤ主義の罠に陥らないために、また反ユダヤ主義というレッテルでの批判的言論封殺に対抗するためにも、ホロコースト生存者二世としてサラさんの問いかけたユダヤ人の倫理を学びなおさなければならない。

そして本書の最後に収録した、サラさんと徐京植さんとの対談「〈新しい普遍性〉を求めて」について。徐さんは、在日朝鮮人マイノリティとしてユダヤ人の作家やパレスチナ人の作家の作品をよく読み（プリーモ・レーヴィやガッサーン・カナファーニーら）、そしてユダヤ人・パレスチナ人の研究者や活動家と対話を重ねられた。とくにこのサラさんとの対談と、そしてガザ地区の弁護士ラジ・スラーニさんとの対談とがあるように、ガザ地区のことはずっと気にかけておられた。今度のガザ攻撃にもたいへん心を痛めておられるなか、本書新装版の刊行を待たずに、二三年一二月に徐さんは急逝された。本書を届けることができなかったことが残念である。

シオニズムはもちろんガザ占領も、欧米中心的な植民地主義と人種主義との複合物であり、またそれがある時期は経済的包摂をまたある時期は人道的援助を占領正当化のイデオロギーとしたという点では、新自由主義的だったり新植民地主義的だったりする。そうである以上、ガザ攻撃についてもイスラエルを批判しておけば済むという話ではなく、日本社会も世界大で構造化された（新）植民地主義と人種主義を共有した一アクターとして責任を有するはずだ。実際、本書所収の小田切拓さんの論考「「対テロ戦争」と二つの回廊」

が示すように、オスロ体制以降の日本政府の関与、とくに平和的仲裁者を装いながら占領の強化に加担するような関与をしたことについては罪深いと言わざるをえない。

そうした意味で、東アジアとパレスチナ／イスラエルとの関係を、たんに類比するだけでなく、構造的な関与と責任を踏まえて〈新たな普遍性〉のもとに問い直すという視点を、徐さんほど強く持ちつづけた論者はいないだろう。徐さんから与えられた課題を背負いつつ、これからは私たちが〈新たな普遍性〉を模索していくほかない。本書再刊がその一助となれば幸いである。

新装版刊行にあたっては、青土社の菱沼達也さんのお世話になった。ガザ地区情勢をめぐって重大な局面において、迅速に刊行の労を取ってくださったことに深く感謝したい。

二〇二四年一月一五日

編訳者を代表して　早尾貴紀

サラ・ロイ　Sara Roy
1955年アメリカ生まれ。政治経済学。ハーバード大学中東研究所上級研究員。パレスチナ、とくにイスラエルによるガザ地区の占領問題の政治経済学的研究で世界的に知られる。ホロコースト生き残りのユダヤ人を両親にもつ。主な著書に*The Gaza Strip: The Political Economy of De-Development*, Institute for Palestine Studies, 1995 / 2nd ed. 2001 / 3rd ed. 2016. *Failing Peace: Gaza and the Palestinian-Israeli Conflict*, Pluto Press, 2006. *Hamas and Civil Society in Gaza: Engaging the Islamist Social Sector*, Princeton University Press, 2011. *Unsilencing Gaza*, Pluto Press, 2021.

岡 真理（おか・まり）
1960年生まれ。早稲田大学文学学術院教授、京都大学名誉教授。東京外国語大学大学院修士課程修了。在モロッコ日本国大使館専門調査員、大阪女子大学人文社会学部講師、京都大学大学院人間・環境学研究科教授を経て、現職。専攻は現代アラブ文学、パレスチナ問題。主な著書に『彼女の「正しい」名前とは何か』（青土社）、『棗椰子の木陰で』（青土社）、『アラブ、祈りとしての文学』（みすず書房）、『ガザに地下鉄が走る日』（みすず書房）、『ガザとは何か』（大和書房）。

小田切 拓（おだぎり・ひろむ）
1968年生まれ。ジャーナリスト。イスラエル／パレスチナを専門に取材し、渡航回数は現在までで70回あまりに及ぶ。取材歴は20年を超え、「ガザ地区」、「隔離壁」、「オスロ合意」や「経済援助による占領加担」についての構造的分析で知られる。「ガザ　人間の壊し方」「ハマスの6ヶ月　民主主義が瓦解する」「開発学の終焉　パレスチナ支援という虚構」など、『世界』『現代思想』等に約30本の長編論考を寄稿。

早尾貴紀（はやお・たかのり）
1973年生まれ。東京経済大学教授。専攻は社会思想史。著書に『国ってなんだろう？』（平凡社）、『パレスチナ／イスラエル論』（有志舎）、『希望のディアスポラ　移民・難民をめぐる政治史』（春秋社）、『ユダヤとイスラエルのあいだ』（青土社）。共編書に『シオニズムの解剖』（人文書院）、『ディアスポラから世界を読む』（明石書店）、『残余の声を聴く　沖縄・韓国・パレスチナ』（明石書店）、『徐京植　回想と対話』（高文研）。共訳書にジョナサン・ボヤーリン／ダニエル・ボヤーリン『ディアスポラの力』（平凡社）、イラン・パペ『パレスチナの民族浄化』（法政大学出版局）、ハミッド・ダバシ『ポスト・オリエンタリズム』（作品社）。監訳書にエラ・ショハット、ロバート・スタム『支配と抵抗の映像文化』（法政大学出版局）。

ホロコーストからガザへ

パレスチナの政治経済学　新装版

二〇二四年三月一〇日　第一刷発行
二〇二四年七月一〇日　第三刷発行

©2024, Sara ROY, Mari OKA, Hironu ODAGIRI, Takanori HAYAO and Yuko FUNAHASHI
ISBN978-4-7917-7633-7 Printed in Japan

著　者　サラ・ロイ
編訳者　岡真理＋小田切拓＋早尾貴紀
発行者　清水一人
発行所　青土社
東京都千代田区神田神保町一－二九　市瀬ビル　〒一〇一－〇〇五一
（電話）〇三－三二九一－九八三一［編集］、〇三－三二九四－七八二九［営業］
（振替）〇〇一九〇－七－一九二九五五

印刷・製本――ディグ
装幀――水戸部功